

氏名（本籍）	田中 圭		
学位の種類	博士（心理学）		
学位記番号	博甲第 9975 号		
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	浅い関係で用いられるスキルに関する臨床心理学的研究		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮容子
副査	筑波大学教授		杉江 征
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司一子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充

論文の内容の要旨

田中圭氏の博士學位論文は、浅い関係を円滑に維持することを対人目標としたソーシャルスキルについて、臨床心理学的検討を行ったものである。その要旨は、以下の通りである。

著者は、第 I 部理論的検討において、第 1 章では、浅い関係に関する先行研究を概観し、浅い関係の有益性について述べている。この 45 年間で、互いに助け合えるような密着した関係を望む人は減少し、会った時に雑談する程度のほどほどの関係を望む人が長期的に増加している（荒牧・村田・吉澤, 2019）。このような近年の対人関係の在り方の変容から、浅い関係をいかに円滑に保つかにについて学術的に検討することは喫緊の課題だと考えられる。著者は浅い関係を定義する上で、親密さの低い段階とするだけでなく、社会調査や社会学の知見をもとに現代青年の友人関係をとらえる視点の広がりに加え“その場限りの付き合いや雑談を交わす程度の付き合い”を浅い関係と定義している。また、知人との交流と幸福感に関する先行研究を概観した結果、浅い関係が精神的健康にポジティブな影響を及ぼす可能性を示唆している。

著者は、第 2 章では、ソーシャルスキルに関する先行研究について概観し、浅い関係を円滑に維持するという対人目標に応じたソーシャルスキルの必要性について述べている。まず、相川 (2009) の“対人場面において個人が相手の反応を解読し、それに応じて対人目標と対人反応を決定し、感情を統制した上で対人反応を実行するまでの循環的な過程”というソーシャルスキルの定義に基づくソーシャルスキル生起過程モデルについて概説している。次に、ソーシャルスキルの実行評価における効果性と適切性の観点からこれまでのソーシャルスキル研究の課題について議論している。その後、対人目標に応じた対人反応の選択という観点に着目し、本研究で新たに導入する視点について述べている。そして、浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキルを「浅い関係で用いられるスキル」と定義し、ソーシャルスキル生起過程モデルにおける位置づけについて述べている。

著者は、第 3 章では、第 1 章および第 2 章での指摘を基に課題について整理し、実証的検討に向けて目的を述べている。まず、著者は、浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキル尺度を作成し、信頼性・妥当性について検討することを 1 つ目の課題としている。次に、周囲の人々との関係の円滑さについて測定する尺度を作成し、浅い関係で用いられるスキルと従来のソーシャルス

スキルが周囲の人々との関係の円滑さにどのように影響しているか検討することを2つ目の課題としている。最後に、浅い関係で用いられるスキルが、精神的健康への影響過程に関して説明した既存のソーシャルスキル理論やモデルにどのように影響を及ぼすか検証し、臨床的介入への応用可能性について検討することを3つ目の課題としている。以上のことから、本論文では、浅い関係を円滑に維持することを対人目標としたソーシャルスキルについて、臨床心理学的検討を行うことを目的としている。そのために、著者は、浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキル尺度の作成、浅い関係で用いられるスキルと対人関係との関連の検討、浅い関係で用いられるスキルの臨床的介入への応用可能性の検討という3つの段階を設定している。

著者は、第Ⅱ部実証的検討において、第4章、1つ目の段階では、浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキル尺度を作成し、信頼性・妥当性について検討することを目的としている。まず、研究1では、自由記述式質問紙調査によって、現代青年がどのようなソーシャルスキルを用いて浅い付き合いをしているかについて探索的に検討を行っている。大学生を対象に質問紙調査を実施し、現代青年の浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキルについて自由記述による回答を求めている。カテゴリ分類の結果、愛想笑いをするスキルや、賞賛するスキルだけでなく、特定の友人と一定の距離をあけて付き合うスキルが抽出されている。そして、研究1の結果に基づいて質問項目を作成し、研究2では、浅い関係で用いられるスキル尺度の因子構造と信頼性・妥当性の検討を行うことを目的として、大学生を対象に質問紙調査を実施している。探索的因子分析の結果、話を聞くときに、肯定していることが伝わるように表面的であるが同意を示す「表面的同意スキル」、笑って明るく振舞いその場を盛り上げようとする「楽しさ演出スキル」、相手との関係を重視し対立を避けようとする「衝突回避スキル」の3因子22項目から構成される浅い関係で用いられるスキル尺度が開発されている。信頼性の検討に関しては、内的整合性の観点からある程度の信頼性が認められている。妥当性の検討に関しては、従来のソーシャルスキルとの関連において、「楽しさ演出スキル」は、「記号化スキル」、「関係開始スキル」との間に中程度の正の相関が認められている。また、「衝突回避スキル」は、「関係維持スキル」との間に中程度の正の相関が認められている。一方で、「表面的同意スキル」は、どのスキルとも中程度の正の相関は認められなかったことから、従来のソーシャルスキル尺度では測定されてこなかった本尺度に独自のものであると考えられる。以上のことから、浅い関係で用いられるスキル尺度は、信頼性、妥当性を有する尺度であることを明らかにしている。

著者は、第5章、2つ目の段階では、周囲の人々との関係の円滑さについて測定する尺度を作成し、浅い関係で用いられるスキルと従来のソーシャルスキルが周囲の人々との関係の円滑さにどのように影響しているか検討することを目的としている。まず、研究3では、周囲の人々との関係の円滑さについて測定する対人関係円滑度尺度を作成することを目的として、大学生に質問紙調査を実施している。主成分分析を行った結果、5項目から構成される対人関係円滑度尺度が開発されている。信頼性の検討に関しては、内的整合性の観点から信頼性が認められている。基準関連妥当性の検討に関しては、対人関係円滑度の高さと、浅い関係友人数との関連が示されている。次に、研究4では、浅い関係で用いられるスキルと従来のソーシャルスキルが対人関係円滑度に及ぼす影響について検討することを目的として、大学生を対象に質問紙調査を実施している。重回帰分析を行った結果、浅い関係で用いられるスキルの下位尺度のうち、「衝突回避スキル」が対人関係円滑度を高める方向で影響を及ぼすことを明らかにしている。一方、従来のソーシャルスキルの下位尺度のうち、「関係開始スキル」と「関係維持スキル」、「記号化スキル」が対人関係円滑度を高める方向で影響を及ぼしていることを明らかにしている。

著者は、第6章、3つ目の段階では、浅い関係で用いられるスキルが、精神的健康への影響過程に関して説明した既存のソーシャルスキル理論やモデルにどのように影響を及ぼすか検証し、臨床的介入への応用可能性について検討することを目的としている。そのために、ソーシャルスキルに関する Lewinsohn(1974)のうつ病の行動理論や Segrin (1996)のソーシャルスキルに関する脆弱性モデルに基づいてモデルを構築し2つの研究を行っている。研究5では、Lewinsohn(1974)のうつ病の行動理論に準拠し、浅い関係で用いられるスキルが行動活性化を媒介し抑うつを低減させるかについて検討することを目的として、大学生を対象に質問紙調査を実施している。共分散構造分析の結果、「楽しさ演出スキル」と「衝突回避スキル」については、目標に向かう活動の活性化を促すことを明らかにしている。次に、研究6では、Segrin(1996)のソーシャルスキルに関する脆弱性

モデルの「健康」領域に焦点を当て、浅い関係で用いられるスキルが対人関係円滑度を媒介しウェルビーイングに与える影響について検討することを目的として、2時点の縦断調査を行っている。一般成人を対象としたスノーボール・サンプリング法により質問紙調査を実施している。交差遅延効果モデルおよび同時効果モデルを用いた共分散構造分析を行っている。その結果、「浅い関係で用いられるスキル」は「ウェルビーイング」を直接的に高めるのではなく、「対人関係円滑度」を媒介することによって、間接的に「ウェルビーイング」を高めるという影響過程を示し、臨床的介入への応用可能性について示している。

著者は、第Ⅲ部総括において、第7章では、第1章および第2章における理論的検討と、第4章から第6章における実証的検討を通して得られた知見をまとめ、総合考察を行っている。結論として、浅い関係を円滑に運営するためのソーシャルスキルには、話を聞くときに、肯定していることが伝わるように表面的であるが同意を示す「表面的同意スキル」、笑って明るく振舞いその場を盛り上げようとする「楽しさ演出スキル」、相手との関係を重視し対立を避けようとする「衝突回避スキル」の3つのスキルがあることを示している。そのうち、「衝突回避スキル」は、日常生活の周囲の人々との関係を円滑にすることに貢献し、「楽しさ演出スキル」と「衝突回避スキル」は行動活性化を促進することで抑うつを低減する効果を示している。さらに、一般成人において、浅い関係で用いられるスキルは、周囲の人々との円滑な関係を媒介しウェルビーイングを向上させる効果を示している。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、密着した関係よりも浅い関係を望む人が増加しているという近年の時代背景を踏まえ、浅い関係を円滑に維持することを対人目標としたソーシャルスキルについて、臨床心理学的検討を行ったものである。浅い関係の有益性を活かした人付き合いをすることが、現代青年の精神的健康にポジティブな影響をもたらすことについて、実証的研究を通して明らかにしたという点は、学術的に見て高く評価できる。また、精神的健康を改善していく上で有用な臨床的示唆も含んでいると評価できる。

令和3年1月7日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。